

# 道 どうひょう 標

*d o h y o*

年間特集「ふしぎ」

第四回・乾坤一摺 山崎 隆さん

連載

あなたのいのちの物語

ほんとうの幸い

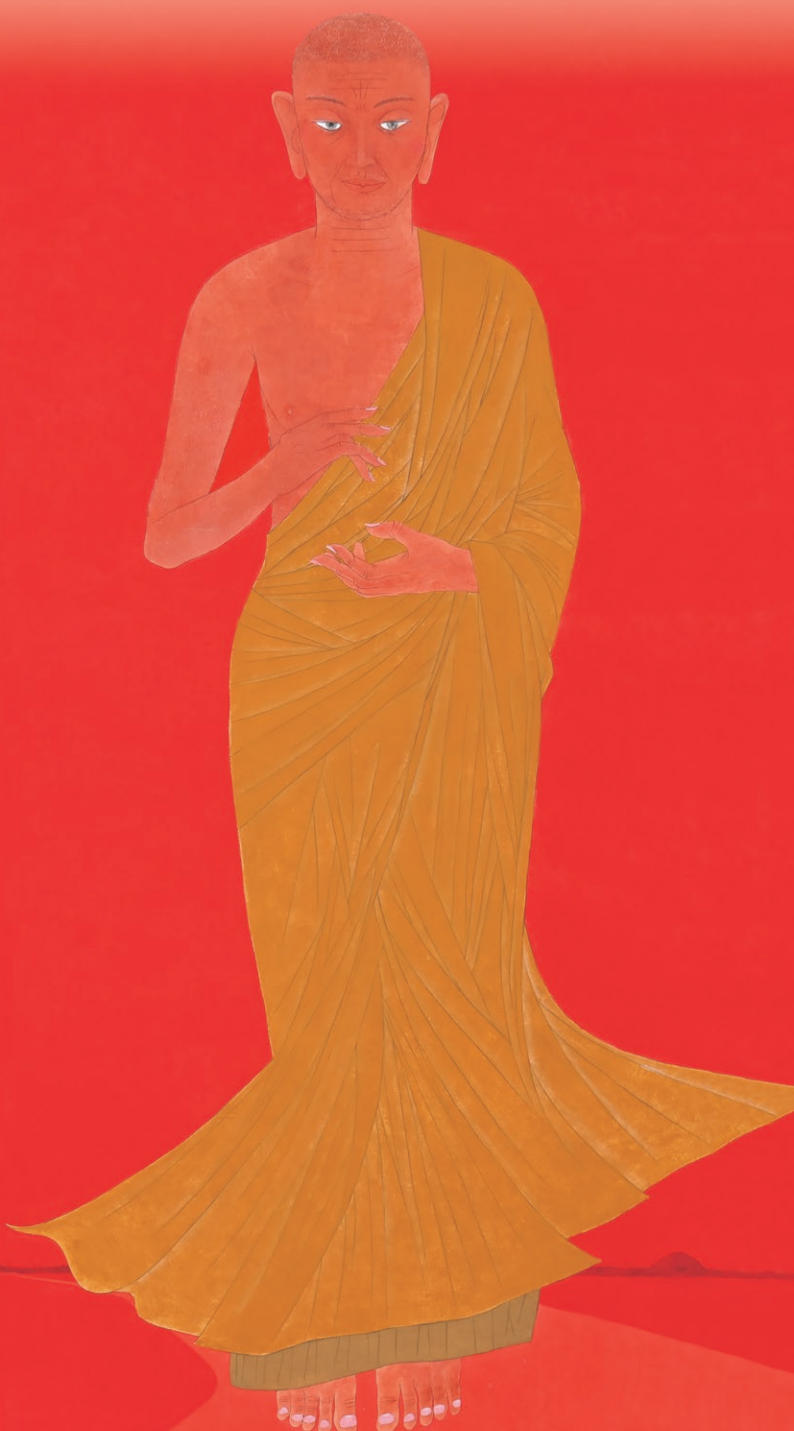
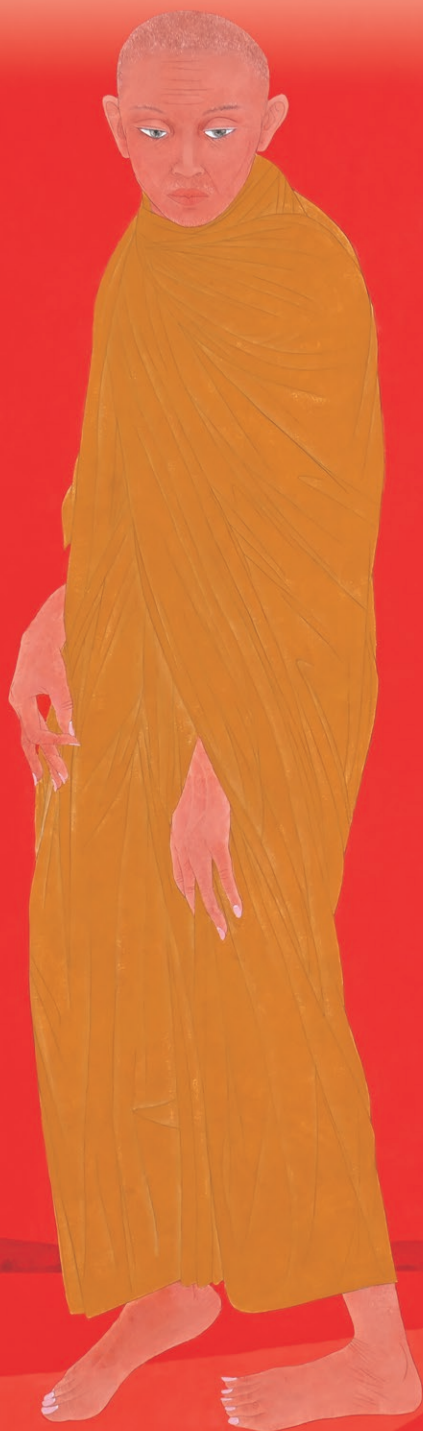
伝承を科学する

モノローグ（独白）が描く心の風景

道しるべ

宗教教育ゼロ国家の現実

2022 秋季号



年間特集 「ふしぎ」

## 乾坤一盤



## 第四回 山崎隆さん

霊峰北叡の山腹、小さな谷間に「麦の家」があります。東に琵琶湖を望み周りは林に囲まれています。昔ながらの葺葺屋根で軒は深く、ぐるつと縁側があり、家のすぐ前に畑、その奥に大岩がどんと座った一段高い田圃が広がっています。一段高く造営してあるのは、日本は瑞穂の国で

あり、米は民族の主食であり、稲作はその精神文化の礎であることへの敬意を表しているからです。実りの季節に、分厚い栗の縁側に座り眼前の田園を見ると、丁度、目の高さに黄金色の稲穂が頭を垂れ、無言で何か語りかけてくるようです。

この地は、先師松井浄蓮翁（明治32年〜平成4年）が青年時代に人生の大きな不安（死、経済、愛情）に苛まれ、その原因を探り真に心の平安を得んが為、終には出家し人生行脚の末、家族と共に入植、狭く困難な谷間だったが戦争で焼土と化した国土を再生し誇りある文化国家を築く為には、自ら耕して生きることだと決心し一盤一盤拓いた処です。

乾坤一盤、大地に一盤打ち込む、全てここから始まります。家族で鎌を握り、土に着いた暮らしの中に人生の不安を昇華した心の安寧があると悟り、終戦間も無い昭和25年に、人間は自然の一員であるという自覚のもと、人類の福祉向上と世界平和を願って「萬世協会」を設立し、集まった同志と共に此の地の更なる開

拓と、稲と麦を中心とした食糧増産技術の研鑽を深めてきました。因みに「麦の家」は、麦の移植栽培技術が広く普及、飛躍的な増収を挙げたことを記念し昭和30年に建てられました。今「麦の家」には、三世代老若男女八人が住んでいます。年齢差も大きいと、良くも悪くも摩擦が多く日々大変ですが、この摩擦が大切、家庭は小社会、分別の付き出した成長点にある孫達にとっては、これからの人生の礎になると思っています。家族が協力し合って暮らしていることは、世の根幹です。

「麦の家」では田を耕し米を、畑を耕し多種類の野菜を作っています。小さな種を土の上に播き水をやり、数日すると小さな芽がでてくる。生命の誕生だ。この瞬間は何時も感銘し安堵する。あの小さな種の何処に生命を宿しているのだろうか？実に不思議だ。太陽の光と温もり、水分を含んだ良い土で作物はどんどん生長します。種を播かれたその場所で一歩も動かず、激しい風雨に晒さ

れても。只管打座の禅僧にとつても、及びもつかない行でしょう。不動の理、実に不思議です。

畑を見まわりキャベツの葉を食い荒らすアオムシを取っていると、幼い孫が「何しているの、虫さんどうするの?」と言ってくる。「キャベツは大切な食べ物なので、虫さんには悪いけど鯉のエサか鶏のエサになってもらう。そうして鯉料理や卵になって、皆がたべられ元気になるよ」と返すと「うん」と頷いている。大人の仕事をしながら生命のこと、その循環のことそして無意識のうち自然や農業のことを肌で感じています。これが食農教育の原点だと思っっています。

日本は米の国という自覚のもと毎年春にはお田植祭、秋には抜穂祭を古式祭事に則り執り行っています。神主さんによる祭事後、老若男女参加者皆で春は早苗を植え、秋は鎌で実った稲を刈り稲架に掛けます。米を主食とする日本人は、「田植え、稲刈りをしてこそ本当の日本人だ。」

## 大地に打ち込むひとくわひとくわ

## 森羅万象、これ当たり前の不思議

と言うと皆、納得顔です。祭事と作業を通じて、自然への畏敬と感謝の念を深めます。例年、正月には農業、環境、社会、文化等についての勉強会を開いています。新春講座と称し、学者、専門家、官僚、芸術家等を講師に招き参加者の皆さんと意見交換し、互いに研鑽を深めます。

「麦の家」は大地に足を着け自然と一体になった暮らしの場であり、農業を中心とした生産の場、そして各種の集いで研鑽を積む学び合いの場であります。

私は幼いころ、一面の蓮華畑の上に大の字に寝転び、天を仰ぎ流れる雲を見ながら自分の将来のこと、家族の幸せのこと、村の調和のこと等をぼんやり考えたことがあった。家族がひとつになって働き、村人が助け合って田植えや稲刈り、村の行事を成していく。大人達は「農業は儲からない」とよく言うが、村祭りや法事で集まった時は、楽しく歌い酌み交わしている。これはこれで大したことではないか、とずっと思っていた。幼いながら自然と一体となった家族農業の中に、楽土を見ていたように思い、多少形は異なっても大

人になるにつれ、世の中は豊かで安定したものになると考えていた。

昭和35年に池田勇人首相が所得倍増論を唱え、昭和36年には農業も経済合理性で考える「農業基本法」が施行され、世の中は一気に耕して暮らす時代から、工場で働いて稼ぐ時代になった。正に農業の国から経済の国へ転換された。これに伴い多数の国民の足が土から離れてしまった。今では土に触れる機会は殆ど無く、大都市はもちろん町や村も道路

は総てアスファルト、広場や家の庭さえ土が見えなくなっている。

元々、人間は自然の一員、土の上に立つことにより自然を意識し、自然との一体感を肌で感じる。特に農業は自然の営みの中で作物を育て、実りを得ている。身土不二を実感できる貴重な生業です。

近年は気候変動による世界各国で大規模な風水害や火災、経済、産業のグローバル化によるコロナウイルス感染拡大、ロシアのウクライナへの侵攻、又これ等が絡み合つての経済、食糧不安等々まさに混乱の時代です。これ等に共通する起因は、グローバル化する経済活動とその根底にある人間の心（精神）です。

長い歴史の過程で、世の中がそれぞれに安定する為に規範があり、これを決定づけるのは真、善、美という人間本来持つべき感性です。何が真で、何が善で、何が美であるか、これが判らないと物事の価値判断ができません。絶対的存在である自然から学ぶしかないのです。

多くの人々は、混乱の時代を乗り越え、平和で幸せな世の中を願っており、自然に向き合うことで真、善、美の理解が進みます。自然は真実であり、善であり、美しいのです。嘘はつかないし、飾り事もしない、在るがままで間違いが無く、為してはならぬことは為さないので。

森羅万象、当たり前と思えるものの中に不思議は内在しています。人間は、食なしでは生きられませんが、「我思う故に我在り」ではありませんが、「我思う」為には「我在り」が前提です。絶対的に食は必要であり、その糧である農の営みの中に、大自然の不思議、生命の不思議、そして、人間の不思議を見出す鍵があるように思います。 合掌

山崎隆（やまざき たかし）

萬世協会 麦の家 主宰

1948年 富山県生まれ

1967年 松井浄蓮師に出会う

1971年 大学卒業し公務員

1976年 萬世協会専従、浄蓮師に師事

結果の整備、各種研鑽会の

執行、日枝紬の制作に係る

1992年 松井浄蓮師 死去

麦の家主宰 今日に至る



## 「ほんとうの幸い」

宮沢賢治

「グスコープドリの伝記」

「イーハトーブ」は宮沢賢治が物語を展開する舞台とした想像世界だ。グスコープドリの家はイーハトーブの大きな森のなかにある。木こりのお父さん、畑仕事などもするお母さん、そして主人公ブドリと妹のネリが森の生き物とともに暮らしていた。ところがブドリが一〇歳、ネリが七歳のとき、天候の異変で日当たりが悪く低温に見舞われ、主食となるオリザという穀物も実らない。お父さんが薪を売りにいっても売れない。次の年も同様で飢饉になってしまった。

やがてお父さんは家を出て行ってしまい、翌日、お母さんもお父さんを探しに行くに出ていってしまふ。取り残されたブドリとネリをそれぞれ事業家のような人が連れ出して、ブドリは工場や農地でこきつかわれる。ブドリも意欲的に働くこうとするが、火山の噴火や日で

(早魃<sup>かんばつ</sup>)でそれらの仕事もできなくなってしまう。

二〇歳ほどになったブドリはイーハトーブの都市へと出ていく。そこで人びとを苦しめる災害を克服する知恵を求めて、無類の博識で自由奔放なクーパー博士に会う。そしてクーパー博士に教えられ、イーハトーブの火山局に行きペンネン老技師に会い、そこでの学びと仕事に携わる。



ある日、測定データからサンムト<sup>1</sup>り火山の噴火が近いことに気づき、クーパー博士の力を借りて、土木作業を行なって被害のない火山エネルギー放出することに成功する。クーパー博士やペンネン老技師は、また、潮汐発電所や適度な噴火による温暖化誘導によって、冷害や早

魃にも対処できると考えて準備を進めている。さらに火山工作によって硝酸アムモニアを雨に溶け込ませて降らせ肥料とし、豊作を導くことにも成功する。

こうして偉大な知恵をもつ科学者とその仲間によって、イーハトーブの人びとに救いがもたらされる。妹のネリとも会うことができ、お父さんのお墓についても知るようになる。ところがブドリが二七歳の年、またしても激しい寒さが続き、かつてブドリ一家に起こったような悲劇

が予想される事態となった。それを防ぐには火山を爆発させ二酸化炭素を気層に増やし、気温を上昇させるのがよい方法だとわかる。カルボナード火山島が適度な温暖化をもたらすので、爆発を誘導させたいのだが、そのためにはどうしても一人が犠牲にならざるをえない。ブドリはその犠牲になることを志願し、ひとり島に残り、イーハトーブの人たちを救った。以上があらすじだ。

宇宙の変動、あるいは大自然の変動により、人々は厳しい苦難に見舞われる。この物語で作者は、そ

うした「みんな」が苦しみ、悲しむ痛切な経験を描き出ししていく。だが、人はそれを戦い、克服することができらるだろう。クーパー博士のような破天荒の偉大なリーダー、また老賢者であるペンネン技師のような人たちとともに歩いていけばそれが実現する。だが、それが実現するにしても犠牲は避けられない。それを自分は担うという悲壮な覚悟も必要だ。ブドリは自己犠牲による世の救いを信じる。

宗教と科学をともに尊んだ作者は道を学ぶ者にそのような崇高な責務があると考え、そこに「救い」を見た。人びとの苦難を受け止め、「ほんとうの幸い」を探す(『銀河鉄道の夜』)ことを目指した作者の願いは、大乘仏教の菩薩の誓願を引き継ぐものだ。

島園進(しまのすすむ)

<sup>1</sup> 1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーンフケア研究所客員所長。著書に、『神聖天皇のゆくえ』(2019年5月)、『明治大帝の誕生―帝都の国家神道化』(2019年5月、春秋社)、『ともに悲嘆を生きる』(2019年4月、朝日新聞出版)、『いのちをつくって、もいいますか』(2016年、NHK出版)、『宗教を物語でほぐす』(2016年、NHK出版)がある。

# 伝承を科学

学

する

モノローグ（独白）が描く心の風景

能という演劇は、主人公が心に秘めている思いを、舞台いっばいに溢れ出させることを得意とする演劇だ。

登場人物の間の会話のやりとりは、必要最小限におさえられ、そのあとには主人公の長いモノローグ（独白）の言葉がつづく。言葉は、散文から徐々に韻文となり、詩的な風景描写も多くなる。ときに難解、ゆえにしばしば退屈だ。しかしその言葉を、声に出してなぞってみると、主人公の深い内面が、心の風景として、不思議に伝わってくる。平家物語に出てくる俊寛の物語を例に、説明しよう。

俊寛僧都は、平氏の世を転覆させるため、クーデターを計画したが、露見してしまい、その罪により、同罪の少将成経、判官康頼の二人と共に、鬼界ヶ島に流罪となる。三人が暮らす絶海の孤島に、あるとき赦免の使いの船がやってきた。赦免使が、許し、つまり都への帰還を告げる。しかし帰ることを許されたのは、成経と康頼の二人だけだった。赦免状に幾度目を通して俊

寛の名前はない。俊寛はただ一人、島に取り残されると知り、絶望する。

この場面は、能でも歌舞伎でも演じられる。歌舞伎（平家女護島）では、鬼界ヶ島の海岸と、そこに接岸した赦免の使いの船という大掛かりな舞台装置の前で、場面が展開する。名前を呼ばれなかった俊寛は「何とて俊寛は読み落としたまいしぞ!」「入道殿の物忘れか、ただし筆者の誤りか!」と、赦免の使いに強く食い下がる。赦免の使いは、俊寛に対し、それは自業自得である、冷たく言い放つ。赦免状を手にし、眺めてまわっていた俊寛は、やがて体全体を震わせ、地面に転がり泣き喚ぐ。情景を伴奏する義太夫節が「浅まし

の命やと、声も惜しまず泣き給ふ」と声高く歌い上げ、クライマッ

クスを演出する。

一方、能（俊寛）では、主役の俊寛と赦免の使いとのやりとりはごく短い。やがて俊寛は、舞台の正面を向き、長い嘆きのモノローグを開始する。他の登場人物はその間、まったく動かず、言葉をはさまない。そのため、舞台の上全体が、俊寛の絶望の気分を満たされていく。言葉が七五調へと変化していく。その流れを、声に出して感じていただきたい。

こはいかに、罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人誓いの網に漏れて、沈み果てなん事は如何に。此ほどは、三人二所に有りつるだに、さも恐ろし



俊寛僧都於鬼界嶋遇康頼之赦免羨慕歸都之図  
(国立国会図書館ウェブサイトから転載)

く・妻ましき、荒磯島に・ただ一人、離れて海士の・捨草の、波の藻屑の・寄る辺もなく、あられんものか・浅ましや。歎くに甲斐も・渚の千鳥。泣くばかりなる・有様かな。

自らを、「捨草」「藻屑」になぞらえ、「嘆く甲斐もまったく無い」に「渚」を掛け、そのまま「渚の千鳥が泣く」という風景を歌い、それを自らの嘆きの声と重ね合わせる。

こういう表現は、ありふれた表現ではないが、絶海の孤島で、俊寛その人の絶望の中から発せられると、それゆえにむしろ、聞き手を共感・共鳴にみちびく力をもつのではない。主人公の言葉は静かな、型どおりの旋律にのせて発せられる。そのことによっても、聞き手は俊寛の心の風景と一体化させられる。

藤田隆則（ふじた たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

◆ 宗教教育ゼロ国家の現実

7月8日、奈良県大和西大寺駅前  
参議院選挙応援演説中の元総理大臣が  
銃撃をうけ、死亡するという大事件が  
勃発した。元総理が狙撃されること自  
体国家的重大事であり、決して許され  
るものではない。誰もが政治信条による  
テロ事件かと想像した。

犯人は41才の奈良県在住の男性だっ  
た。凶器は手製の拳銃だった。逮捕後に  
動機が判明して、さらなる衝撃が走った。

犯人の母親が某宗教団体の熱心な信者  
であり、その多額な献金のため家庭崩壊  
を来していた。その団体と元総理の親密  
な関係を恨んでの犯行だったという。手  
製の拳銃に恨みの深さが感じられる。

その後、宗教団体と政治家との選挙  
がらみの関係が次々と報道され、両者の  
関係の深さを知らされることになった。  
選挙時の応援者は立候補者には「神」  
のような存在といえよう。

でも、特定の宗教団体が政治家との  
特別な関係を結ぶための応援ならば、民

主義の根幹を危うくし、選挙を冒瀆  
する行為といわねばならない。

思うに、我々は「靈感商法」や「オー  
ム真理教」など、多くの悪質な宗教活  
動を目にしてきたはずである。にもかか  
わらず、この事件を通して、今も強迫観  
念による常軌を逸した行動が、信仰心と  
いう虚言によって正当化される現実を目  
の当たりにすることとなった。失礼なが  
らこの国の人びとの宗教的無知が露呈さ  
れたといえる。

宗教は「正しい生き方と正しい死の受  
入れ方」を教えて、人間に正しい価値基  
準を確立させるものである。言い換えれ  
ば、物事の判断基準が変わることである。  
故に人格、行動共に変貌する。それほ  
ど大きな影響力を持つものが宗教であ  
る。したがって「何を信じても良い」な  
どとは決して口にする事の許されない  
言葉である。

この原因は宗教教育ゼロの状況にあ  
る。人は宗教の重大さ、否、恐ろしさを  
学ぶべきである。

編集後記

年間特集「不思議」というテーマで  
各方面の方々から執筆いただいた。こ  
の数年の間に本当に大変なことが起  
こっている。それも何十年、何百年に  
一度、そして人類が未だかつて経験した  
ことのない事が含まれているのである。  
この数年の出来事は我々の日常性を奪  
い、既存の価値観をも揺るがしている。

そんな中、このテーマが相応しいであ  
ろうかと案ぜられた。しかし寄せられ  
た原稿は意外であった。どの方も我々  
が日常の中で忘れ去られていたもの、  
見えなかったもの、そして何が大事で  
根本であるか、ということを顕わして  
いただいたように思える。それは「不  
思議」という言葉に含まれる我々日本  
人がその風土の中で長年培ってきた生  
活原理、美意識や死生観のことである  
のかも知れない。

明治以来、欧米路線に転じ国作り  
を進め、お陰で豊かな先進国となった。  
しかし、近年日本人を蝕む精神不安  
子殺しや無差別殺人等の多発。そし  
て今の異常気象そして世界戦争。こ  
れは近代文明の副作用なのであろう  
か？その答えは誰も解らない。少なく  
とも我々日本人は今、リセットを求め  
られているのは確かである。

合掌

仏壇仏具のことは  
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007  
ホームページ <http://nttj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)  
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12  
(四天王寺西門交差点 西へ30m)

表紙の絵

舍利弗(サーリプッタ)と目犍連(目  
連、モツガラナ)は釈尊の弟子の中で  
も双肩をなす最も重要な弟子であった。  
二人は子供の時から友人であり、同時  
に弟子となり、お互い阿羅漢(アラハン)  
の境地、即ち釈尊以外の人で、仏教の  
悟りをひらいた。舍利弗は智慧第一と呼  
ばれ釈尊の代わりに教説を人々に説かれ  
ていた。經典にも句の先々に舍利弗が語  
たと書かれている。目犍連は神通第一と  
呼ばれ、六神通を感得した。その中で  
も漏神通とは世界と人生についての真理  
を悟りうる智慧である。二人共釈尊よ  
り年長であり、釈尊の入滅の前年に没し  
ている。舍利弗は病死、目犍連は地方  
説法中に暴力によって殺されている。神  
通によって防げる力があつたが、因縁と  
感得し甘んじて殺された。

畠中光享(はたなか こうきょう)

日本画家 / インド美術研究家  
/ 真宗大谷派僧侶

天岸淨圓 (あまぎし じょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。

行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。